

待望の正義の勝利

ムサ・マルジャンリ、
編集長

IRS – Heritage (「遺産」)誌の本号の出版は第二次カラバフ戦争が始まった日とちがって合っています。カラバフをめぐる話題は30年以上もアゼルバイジャン政府や社会に中心となっています。昨年の秋、44日間の戦争の結果、アルメニアに支配されたアゼルバイジャン領土がやっと返還されました。それは正義の勝利で、今はアゼルバイジャンが戦略的にも戦術的にも有利な立場を取っています。アゼルバイジャンの戦勝で終わった44日間の戦争後、その地方の地政学的状態は、ジェイフン・バイラモフ・アゼルバイジャン外務大臣の記事で説明されています。その上、戦争間にアルメニア軍が前線から離れたアゼルバイジャンの都市や村を戦術弾道ミサイルで攻撃したことについても簡略な情報が用意されています。

独立の30周年を迎えるアゼルバイジャンに関する慶應大学教授、廣瀬陽子先生の記事も以上の内容に近いです。その記事は、独立以降、アゼルバイジャンは達成した目標などについて語っています。また、2020年の戦争間にアルメニア側が起こしたテロ行為やアゼルバイジャンの経済、文化の豊かさ、軍ポテンシャル、地政学的な状態についても幅広く説明されています。和田純一駐アゼルバイジャン日本国大使のアゼルバイジャンに関する想い及び一年間の大使活躍についてのメッセージも興味深いです。

今年は、有名なアゼルバイジャン詩人、思想家、東洋文学者、ニザミ・ギャンジェビの生誕880周年にあたります。この機会に本号で詩人の伝記及び創作に関する記事も提供しています。記事にニザミ・ギャンジェビの伝記に議論を引き起こすところや詩人の作品が影響を与えた分野、詩人の創作宣伝に行う活動について書いてあります。

また、最近アゼルバイジャンで有名になったザクロフェスティバルや野外博物館と言える高山村ブドゥグに関する記事も読者の注意を引き付けると思います。本号は読者のアゼルバイジャンについての知識を深めるに役立つことが出来れば幸いです。今後もアゼルバイジャンに間する新たなことをご一緒に楽しみましょう。